

2025年9月21日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教53「証言者」

エレミヤ20：9、ヨハネ9：24～34

ユダヤ人の尋問はやがて「ののしり」となり（28節）、そしてついにこの人は会堂の外に追い出されてしまいます。これはユダヤ人の共同体からの追放を意味しています。しかし、このような試練の中で、この人の信仰はいよいよ深められていきました。イエスさまがはっきり見えるようになる。試練が信仰を研ぎ澄ますという経験でしょうか。ペトロの手紙の御言葉を思い起こします。「あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのです」（I ペトロ 1：7）火で精錬するというのは鉄を焼いて不純物を取り除き、純度を増すのです。信仰もまたそういう試練をくぐり抜けなければなりません。

多くの人は試練から逃れるために信仰を求めるかもしれませんが。しかし本物の信仰は、むしろわたしたちを試練へと突き動かしていきます。それは何よりもわたしたちの信仰の対象であるイエスさまが荒野で試練を受けられ、そして十字架という最大の試練を負われたからです。そのイエスさまに従う歩みは苦しみがあって当然なのです。この9月に入りましてから、近くの自衛隊の正門のところに一人の僧侶が座り込みを続けています。健軍駐屯地にミサイル配備の決定を受けてのことです。聞くとハンガーストライキということで断食をされています。先日、その僧侶の方とお会いしました。断食されて10日目くらいでしたでしょうか。暑い日でしたがやつれた様子もなく、むしろ清々しさを感じるような印象でした。「ありがとうございます」と一言お礼を言われて帰っていかれました。僧侶にとって断食は修行の一つです。わたしたちはそういうことはできませんが、自らに試練を課して信仰を表すことも大事なことのかもしれないと感じました。というのは、わたしたちはあまりにもこの世の生活に慣れきってしまっていて、心地よさばかりを求めてしまっていて、火で精錬される経験を忘れているからです。試練の時は祈りも深まり、御言葉に聞こうとするかもしれない。しかし平穏な時ほど祈りを忘れてしまうのです。あるいは忙しさの中で神さまに寄り頼むことを忘れているのです。あまりにも世俗化し、果たして自分に信仰があるのかないのか分からないほどです。

教会で読み継がれている古典の一つに『イミタチオ・クリスチ』（キリストにならいて）という本があります。14世紀頃のもので、トマス・ア・ケンピスの作と言われますが、近年はそう言われていません。トマスの属していた修道会の創始者ホロートという人が書いた説が強いそうです。日本語には「まぶねの中に」で有名な由木康先生の翻訳が有名です。これも50年以上前のものです。わたしも時々思い返しては読むことがあります。例えば、章立ての言葉を読むだけでも教えられことがあります。「キリストにならって、この世のあらゆるむなしいものをさげすむべきこと」「多言を避けるべきこと」「死について静思すべきこと」「孤独と沈黙を愛すべきこと」最後は聖餐の勧めで終わります。「苦難と逆境とは有益であること」という章があります。その中に「時おり矛盾のために苦しみ、正しいことをしながらも誤解されるのは、わたしたちにとってよいことである。そのような卑下はわたしたちが虚栄に陥るのを防ぐ・・・その時こそ彼は悲しみ、嘆き、切に祈る」と。

このような正しいことのために苦しむことは、しばしばわたしたちも経験するかもしれませんが。でもそれが虚栄に陥るのを防ぎ、祈りへと導く。信仰は、そのように生きた経験です。単なる

教えではなく、経験を通して身に着くものです。先ほどの断食も身体性、身体に直接関わることです。断食を通して信仰を身体に落とし込む。経験にするのです。『イミタチオ・クリスチ』はそういう経験を通してイエスさまと深く出会っていくことを教えます。だから最後が聖餐の勧めで終わるのです。聖餐はまさにイエスさまと一つになる経験だからです。そこに信仰の目的、究極的なことがあります。

この目の見えなかった人はこのように言います。「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです」(25節)そこには「目の見えなかったわたしが、今は見える」という経験があります。その前にはイエスさまが泥を目に塗り、シロアムの池に行って洗ったという経験があります。そのような経験こそ、イエスさまの救いを証言する力になります。今日の箇所でこの人が力強く堂々とイエスさまの救いを証言しているのは、その経験が土台にあるからです。それはそうでしょう。ありもしないことを証言することはできません。実際に経験したからこそ証言できるのです。

教会の歴史もこのような証言に支えられてきたことを忘れてはなりません。今日は独立記念の礼拝です。この後1890年の信仰の告白をします。これはわたしたちの教会が独立当初、日本基督教団になる前に告白していた信仰告白です。信仰告白というのは紙に書いた条文ではありません。信仰の証言であり、それこそ経験です。この告白の中に「聖霊に啓迪せられたり」とあります。「啓迪」という言葉は聞き慣れない言葉ですが、この告白文の草稿を書いた宣教師ウィリアム・インブリーは「inspired」としています。感化したり、ひらめき、感情的な刺激、感動と言ってもよいでしょう。聖霊がイエスさまの救いにわたしたちを導き、魂のうちに深い感動を起こす。そういう経験です。わたしたち信仰者は魂の深いところで皆そういう経験をしてきました。体験が証言を生むのです。だからこそ、今日まで教会はイエスさまの救いを証言し続けることができたのではないのでしょうか。

この人はののしられ、最後は外に追い出されました。両親から見捨てられ、ユダヤ人の共同体からも捨てられるという経験をします。けれども、イエスさまも人々からののしられ、最後は十字架にかけられました。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれます。イエスさまは父なる神さまから捨てられる経験をなさった。それはわたしたちが受けるべき裁きです。それを担われ、ご自身が捨てられた。それでわたしたちは神さまとのつながりを与えられたのです。

この人は、やがて弟子としてイエスさまの十字架の死を目の当たりにすることになったでしょう。でもその時にイエスさまのお姿をかつて自分が捨てられた経験と重ね合わせることができたでしょう。自分の苦しみとイエスさまの苦しみを重ねることができた。その経験がますますこの人を証言者として突き動かしたのではないのでしょうか。そういう一人一人の信仰の生きた経験の上に教会の歴史は重ねられていきました。

天の父よ。わたしたちの信仰が生きた経験となりますように。魂のうちに、この体のうちに聖霊の感動を起こしてください。そしていよいよあなたの救いの証言者として立たせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。